

ヴェルディ：レクイエム

カトリック教会の「死者のためのミサ曲」である「レクイエム」の歴史は古く、中世のグレゴリオ聖歌の時代にさかのぼる。もともと教会の儀式の中で演奏されたものだが、19世紀以降は最初から演奏会用に書かれたレクイエムも多くなった。2つの世界大戦があった20世紀には、戦争レクイエムのような作品も生まれたほか、今日も大災害などで犠牲になった人々のためにレクイエムは書き続けられている。

本日の「レクイエム」の作曲者であるジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）は、「椿姫」、「アイーダ」、「オテロ」などでおなじみのイタリア・オペラの巨匠である。そんなヴェルディがなぜ宗教音楽の「レクイエム」を書くことになったのか。それには、二人の人物の死が関わっていた。

その一人が、ジョアキーノ・ロッシーニ（1792-1868）である。ヴェルディより20年余り年上のイタリアの作曲家ロッシーニは、「セヴィリアの理髪師」など数々のオペラで成功を収めた後パリに移住し、「ウィリアム・テル」を最後にオペラ作曲の筆を断ったことで知られる。オペラの世界から引退しながらも、パリでサロンを開きながらヴェルディら若手作曲家を応援していた。1868年にロッシーニが亡くなった時、ヴェルディはイタリア人の作曲家13人の共作による「レクイエム」の制作を企画したが実現せず、この時自らが書いた「リベラ・メ（私を解き放ってください）」が手元に残ったままとなっていた。

第2の人物が、アレッサンドロ・マンゾーニ（1785-1873）である。マンゾーニはイタリアの国民的作家で、代表作には19世紀のイタリア統一運動の精神を象徴する歴史小説「いいなずけ」などがある。ヴェルディはマンゾーニの詩や小説を愛読し、その才能を心から尊敬していた。1873年にマンゾーニが亡くなると、ヴェルディは追悼の「レクイエム」を作曲して命日に初演することを墓の前で誓った。出版社のリコルディを通してミラノ市の協力が得られることになり、企画は今度こそ実現へと向かった。

ヴェルディはすでに作曲していた「リベラ・メ」を構想の要として作曲を開始、翌1874年4月にはほぼ全曲が完成し、マンゾーニの一周忌に当たる5月22日、「レクイエム」はミラノのサン・マルコ教会で、作曲家自身の指揮で初演された。その後、より多くの人に聴いてもらうためにミラノ・スカラ座でも演奏され、さらにヨーロッパ各地で熱狂的に迎えられた。

「レクイエム」とは、もともと死者が安らかに天国に行けるよう、神に祈りを捧げる曲である。ただし天国に到るまでには、神の裁きを受けなければならない。天国へ行けるかどうか、最後の審判を下される恐ろしさを表現したのが「ディエス・イレ（怒りの日）」の場面である。この場面はバロック以降のレクイエムの作曲家が最も力を入れてきたものだが、ヴェルディはこのシーンを、誰よりも劇的に表現した。前半の「怒りの日」がレクイエム全体のほぼ半分を占めており、「トゥーバ・ミルム（不思議なラッパ）」では、舞台上と舞台の外側で、金管のファンファーレが最後の審判の時を告げる。フォーレが「怒りの日」の場面を省いたことは有名だが、ヴェルディのレクイエムは、それとは真逆のドラマティックなレクイエムである。

だが、激しさばかりではない。後半、ソプラノとメゾ・ソプラノの二重唱と合唱による「アニヌス・デイ（神の小羊）」の流麗な調べ、「ルクス・エテルナ（永遠の光）」の神秘的な美しさをはじめとして繊細な表現にも長

けており、全曲を通してヴェルディの深い宗教的感情が心に迫ってくる。

全体の構成は次のとおりである。（詳しくは歌詞対訳をご参照ください。）

第1曲 「レクイエム（入祭唱）」と「キリエ」

第2曲 「ディエス・イレ（怒りの日）」

第3曲 「オフエルトリオ（奉納唱）」

第4曲 「サンクトゥス（聖なるかな）」

第5曲 「アニュス・デイ（神の小羊）」

第6曲 「ルクス・エテルナ（永遠の光）」

第7曲 「リベラ・メ（私を解放してください）」

遠山菜穂美

楽器編成：フルート 3（ピッコロ持ち替え 1）、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 4、ホルン 4、トランペット 4、トロンボーン 3、チンバツソ、ティンパニ、
バスドラム、弦五部、独唱（ソプラノ、メゾソプラノ、テノール、バス）、
混声四部合唱

（バンド） トランペット 4

※スコア上の表記